

1 主題設定の理由

近年、情報化が急速に進み、若い世代でも情報に溢れた社会で生活している。膨大な情報の中から必要な情報を正確に捉える能力や、自分の考えや意見を情報として発信していく能力が重要視されるようになった。中学校における国語教育では、自分の意見を述べるための論理的思考力の育成がいつそう求められるようになってきている。また、学習指導要領でも、自分の立場や考えを明確にし、相手を説得できるような話の構成の工夫をする能力の育成が求められている。

本校の生徒には、仲間の意見から考えたり、自分の考えを付け足して考えたりする姿や、仲間と教え合ったり、意見を伝え合ったりする姿が見られる。1学期に行った「ちょっと立ち止まって」という説明文の授業の振り返りでは、「自分とは真逆の意見でも、聞いてみると『確かに』と新たな発見ができる」と、意見交換で自分とは異なる見方や考え方から新たな気づきをもち始めていた。また、「文章構成が最初は分からなかったけれど、他のグループの意見を聞いて、そういうつなげ方もあるのかと思い、つなげる言葉を見つけていてすごいと思った」と仲間の意見を認める姿があった。授業での仲間との関わり合いを大切に、人から学ぼうとする意欲を見ていると、自らも発信をして、相手に自分の意見を伝えたときに、分かってもらえる喜びをもっと実感させたいという願いをもった。

一方、別の単元でできるようになりたいこととして、「人に言われなくても筆者が伝えたいことや、事例や一般論などを書いているところが分かるようになりたい」と書いてあり、自分の力で筆者の伝えたいことや、文章の内容を読み取りたいという思いが書かれていた。また、別の生徒は、「説明文で筆者の一番伝えたいことを読み取れるようになりたい。また、なぜそう思ったのかも、文章中から考えたい。」と答えた。筆者の伝えたいことを読み取り、自分の意見の根拠や理由を明確にして伝えたりすることができるようになりたいと感じていた。また、自分の意見を述べる場面では、意見の根拠や理由を尋ねると、答えられないこともしばしばであった。そこで、筆者の主張や文章の内容を正確に読み取りたいという願いや、自分の意見や読み取ったことの根拠や理由を明確に述べたいという願いを実現させ、自信をもって意見を伝え合えるようにしたいと考えた。

本単元では、比喩についての説明文の読み取りから、言葉や表現に着目して文章構成を捉えたり、文章の内容を正確に捉える方法を学んだりする。文章の中のまとまりで小見出しを考えたり、仲間と意見の共有をしたりする中で、繰り返しの表現や、言い換えの表現、筆者の主張とのつながりに気づき、文章の内容が正確に伝わる中心的な言葉を捉えたり、説得力のある根拠をもって意見を述べたりすることを期待する。

そこで、研究主題を「文章の内容を正確に理解し、根拠をもって自分の意見を表現できる生徒の育成」とし、研究に取り組むことにした。

2 研究の構想

(1) めざす生徒像

文章の内容を正確に理解し、根拠をもって自分の意見を表現できる生徒をめざす。

(2) 研究の仮説

仮説 1

表現方法に基づいて言葉を精選する方法を身に付けるための工夫をしたり、単元の始めと終わりに読み取りの視点についての考えを比較する場を設定したりすれば、文章の中心的な言葉を捉え、内容を正確に理解することができるだろう。

仮説 2

仲間と自分の意見を比較して多様な見方を捉えられるようにするための工夫をしたり、単元で学んだ見方や考え方を活用する場を設定したりすれば、根拠となる言葉を用いて自分の意見を表現することができるだろう。

(3) 仮説を具体化する手だて

仮説 1 に対する手だて (ア) 「言葉を精選する方法を身に付けるための工夫」

言葉に着目して、段落の役割やつながりを意識しながら文章構成を整理させる。そして、本論の三つのまとまりについて、内容が正確に伝わる工夫がされている表現や言葉を探して小見出しを作成させることで、文章の中心的な言葉を捉えることができるようにする。

仮説 1 に対する手だて (イ) 「読み取りの視点についての考えを比較する場の設定」

単元の始めに、文章を正確に理解するために必要な工夫について考える場を設定する。そして、単元の後半に読み取りの視点を整理し、単元の始めに考えたものと比較する場を設定することで、文章の内容を正確に理解するための読み取りの視点を習得できるようにする。

仮説 2 に対する手だて (ア) 「仲間と自分の意見を比較して多様な見方を捉えられるようにするための工夫」

自分が付けた小見出しとその根拠となる言葉や文をタブレット端末で仲間と共有し、お互いの見方を見比べることができるようにすることで、より適切な言葉や根拠を見つけられるようにする (資料 1)。

(資料 1) 使用するスライド

本論 1 小見出し



※資料 1 のうち、左のスライドには、考えた小見出しを書き、SKY MENU を用いて全体に共有する。右のスライドは、教科書の本文から本論を切り抜いたもので、小見出しの根拠となる言葉に直接線を引きながら、タブレット端末で共有したり、話し合いをしたりできるようにしたもの。

仮説 2 に対する手だて (イ) 「学んだ見方や考え方を活用する場の設定」

読み取りの難易度がやや高めの説明文を提示し、文章の中心的な言葉や筆者の主張を捉える場を設定することで、読み取りの視点を根拠にして捉えたことを表現することができるようにする。

(4) 抽出生 A の実態と期待する姿

抽出生 A の実態

- ・実践前の説明文の授業では、接続語に着目して、段落のつながりや役割を読み取ることができた。
- ・授業では、仲間との意見交流や話し合いの中で、自分の意見と仲間の意見とを比較しながら考えようとする姿が見られる。
- ・「ちょっと立ち止まって」の振り返りでは、今後できるようになりたいこととして、「説明文で、筆者の一番伝えたいことを読み取れるようになりたい。また、なぜそう思ったのかを、文章中から考えたい。」と書いた。文章全体の文章構成を読み取れるようになった一方、筆者の主張や伝えたいことを正確に読み取することは、まだできていない。また、自分の意見の根拠や理由を問い返した際に、自信をもって答えられなかったことがある。

抽出生 A に期待する姿

- ・表現方法に着目して言葉を精選することで、接続語だけでなく、他の言葉にも着目し、文章の中心的な言葉を捉え、内容を正確に理解できるようにしたい。
- ・仲間と自分の意見の比較から、自分にはなかった見方に気づき、多様な見方を捉えられるようにしたい。
- ・タブレット端末を用いて、意見の根拠となる文や言葉を明確にして、自分の意見を伝え合うことで、自分の意見に自信をもって、説得力のある説明ができるようにしたい。

(5) 指導計画 (5 時間完了)

時間	学習活動
1	○文章を正確に理解するために、どんな工夫が必要か考えよう。
2	○全体の内容をつかみ、文章構成を整理しよう。
3	○本論の言葉に着目して、内容を理解しよう。
4	○小見出しについての話し合いを通じて、読み取りの視点を考えよう。
5	○学びを生かして、内容を正確に捉えよう。

3 実践と考察 (生徒 A の変容を追って)

(1) 文章を正確に理解するために必要な工夫について考える生徒 A (仮説 1 手だてイの検証)

単元導入で、説明文を正確に理解するために必要なことについて考えさせた。これまでの学びで得た知識を確認し、単元の始めの段階での自分の考えを整理することができるように、以前に学んだ説明文である、『ダイコンは大きな根?』や『ちょっと立ち止まって』などを振り返りながら考えるよう伝えた。それに加えて、自分が単元を通して学んで、できたという実感をもつことができるように、今回の単元でできるようになりたいことも考えさせた。

生徒 A (以下、A) は、ノート (資料 2) に、「説明文を正確に理解するためには、筆者の主張になる部分や、例示の部分を整理して考えることが大切だ」と書いた。『ちょっと立ち止まって』の単元で着目した例示について振り返り、主張と例示とを区別することが、筆者の主張を正確に理解するために必要だと整理している。また、「段落の役割やつながりから、筆者が伝えたいことを読み取れるようにしたい」と書いた。以前、説明文の単元で、段落同士の関係から筆者の主張に説得力をもたせる工夫を見つけた経験を生かして、今回

の単元でできるようにしたいこととして挙げている。そのために、『『このように』、『このことから』、『それに対して』などの言葉を探したり、文章の要点をまとめたりしたい」と書いた。

（資料２）第１時 生徒Ａのノート

段落同士のつながりを読み取れるようにしたいです。説明文を正確に理解するためには、筆者の主張になる部分や、例示の部分を整理して考えることが大切だと思います。
段落の役割やつながりから、筆者が伝えたいことを読み取れるようにしたいです。そのために、『このように』、『このことから』、『それに対して』などの言葉を探したいです。

また、意見交流後、Ａは振り返り（資料３）に、『説明文の読み取りで大切なことは、段落のつながりを整理し、筆者の主張を読み取ることだ』と書いた。仲間の考えを聞き、改めて自分の考えたことを整理し、接続語や、文章の重要な部分を意識していることが分かる。しかし、文章の要点がどのような文や言葉なのかについては、考えられていない。

（資料３）第１時 生徒Ａの振り返り

ＢさんとＣさんの意見で、説明文の読み取りで大切なことは、段落のつながりを整理し、筆者の主張を読み取ることだと思いました。私は段落のつながりを捉えることが苦手なので、『このように』『それに対して』などの言葉を探してつながりを捉えたり、文章の要点をまとめたりしたいです。

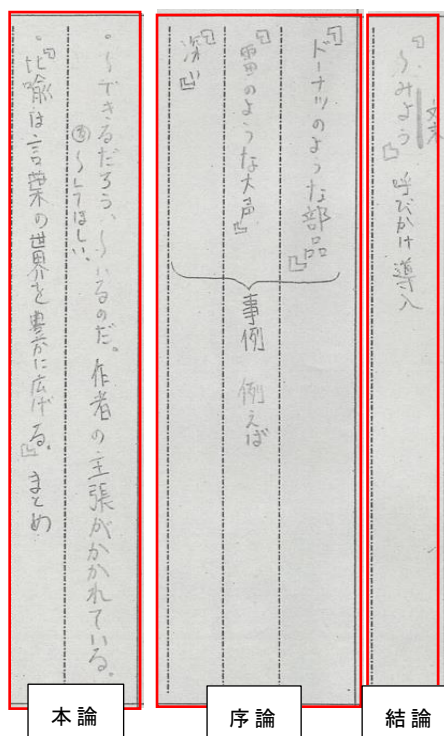
（２）言葉に着目して、文章構成を整理する生徒Ａ（仮説１手だてアの検証）

説明文『比喻で広がる言葉の世界』の文章構成を理解し、内容を正確に読み取るために、本文を序論、本論、結論の大きく三つに分けることにした。内容にも着目させるために、分ける前に、これまでの学びを振り返りながら、三つのまとまりの役割を確認した。その際に、分けるときに意識するポイントとして、接続語や指示語、文末表現などが出てきた。

本文を三つに分けると、Ａはノートに（資料４）、序論の着目ポイントとして、『みよう』という文末に線を引き、『文末』と横に書き、『呼びかけ、導入』と書いた。分けるときのポイントとして仲間から出てきた意見の一つである文末表現に着目し、文末が読者への呼びかけになっているため、序論に含まれる段落だと考えていることが分かる。また、本論を分けるときには、『『ドーナツのような部品』『雷のような大声』『深い』』を抜き出し、『事例、例えば』と書いた。具体的な事例が書かれているところは本論の段落だと考えていることが分かる。さらに、Ａは、文末だけではなく、本文の内容の言葉に着目し始めていた。結論を分けるときには、『『できるだろう』『いるのだ』』という文末を抜き出し、『作者の主張がかかっている。』と書き、続けて『『比喻は言葉の世界を豊かに広げる。』』まとめ』と書いた。文末表現や内容に着目しながら、筆者の主張を考え、結論を整理していることが分かる。

Ａは振り返り（資料５）に、『『から』』というのは、ある事実に対する理由なので、事実を述べている、『『だろう』』というのは、推測のときに使う言い方なので、筆者の考えを述べている』と整理して書いた。文末表現の細部に注目して、違いを意識して文章構

（資料４） 生徒Ａのノート



成を考えていることが分かる。

(資料5) 第2時 生徒Aの振り返り

私は、「から」や「だろう」という文末表現に着目して、文章構成を考えました。「から」というのは、ある事実に対する理由なので、事実を述べていると考えました。

一方、「だろう」というのは、推測のときに使う言い方なので、筆者の考えを述べているときだと思います。序論や本論の文末表現に注目して読み解いていきたいです。

(3) 中心的な言葉を捉えて小見出しを作成する生徒A (仮説1手だてアの検証)

文章の内容の読み取りに入る前に、内容を正確に分かりやすく人に伝える方法として、小見出しという方法があることを理解させるために、小見出しのある説明文(「人類よ、宇宙人になれ」)の一部を切り取って、小見出しがあるものとないものを比較する場を設けた。そして、小見出しがそれぞれの段落の中心的な言葉を捉えて書かれていることに着目させた。

その後、『比喩で広がる言葉の世界』の本論の内容を、言葉に着目して正確に理解するために、三つに分けてから小見出しを作成させた。資料6は、Aが作成した小見出しである。Aは、本論1で、「ある事柄を、似たところのある別の事柄で表すことを、比喩という」に線を引き(資料7)、「比喩の説明」という小見出しを付けた。続けて、本論2で、「このように、比喩には、形状をわかりやすく伝える効果がある」に線を引き(資料7)、「比喩の効果」という小見出しを付けた。Aが付けた小見出しのいずれも、文章の内容が正確に伝わる中心的な言葉を捉えることができている。最後に、本論3で、「形のないものでも、こうした比喩の発想によって表現していくことができる」に線を引き(資料7)、「形のないものを表現する比喩」という小見出しを付けた。この小見出しを付けた根拠としている文は、本論3で具体例を用いて筆者が伝えたい、比喩の発想による表現の広がりについて、捉えられる文である。一方で、Aが作成した小見出しは、具体例自体を指している言葉であり、筆者が伝えたいことまでは表現できていない。

(資料6) 生徒Aの書いたスライド

本論1 小見出し

比喩の説明

本論2 小見出し

比喩の効果

本論3 小見出し

形のないものを表現する
比喩

(資料7) 生徒Aが本文に線を引いたプリント

「このように、ある事柄を、似たところのある別の事柄で表すことを、比喩という。『ヨットのようだ』のように、「まるで」「ようだ」「みたいだ」などを使って表すこともあるが、「あの人はずっと辞書だ」のように、それらの言葉を使わずに表現することもある。大切なことは、たとえるものと、たとえられるものとの間に共通点があり、それが広く共有されていることだ。蝶の羽は、ヨットの帆に形が似ている。だから、読者は瞬時に情景を思い描く。「あの人はずっと辞書だ」と聞けば、「あの人」が豊富な知識をもち、たずねればいつでも必要な知識を与えてくれることが伝わってくる。辞書にはたくさんの言葉の意味がのってあり、知りたいことがあるときに役立つものだ。多くの人に共有されているからだ。」

したがって、相手がよく知っているものであれば、未知のものでもわかりやすく説明することができる。例えば、図のような形の部品をあなたならどのように説明するだろうか。真ん中に穴の空いた丸いドーナツを相手を知っているならば、一言で「ドーナツのような形」ということができる。しかし、もし比喩を使わないとしたら、言葉を尽くしても、伝えることは難しいのではないだろうか。このように、比喩には、形状をわかりやすく伝える効果がある。」

また、比喩には、物事の特徴をより生き生きと印象づける効果もある。例えば、「雷のような大声」という場合、声の大きさを響き渡る雷鳴にたとえているだけでなく、雷のもつ激烈さや迫力、おそろしさなどのイメージも重ねている。実は、こうした比喩の発想は、普段私たちが比喩だと認識していないような表現の中にも生きている。例えば、「頭の中に入れておく」「そのことで頭の中がいっぱい」「緊張して、頭の中が空っぽになる」などという表現では、「頭」が「入れ物」、知識や感情が「その中」に入っているものとして捉えられている。「胸がいつぱいだ」「心が満たされる」なども同様だろう。」

さらに、「深く感謝する」「深い感動」のような表現にも比喩の発想が生かされている。本来、「深い」は、深い池のように、表面からの距離が離れている様子を表す。しかし、表面からはうかがい知れないほどの中身があるといった意味で、精神活動についても「深さ」が用いられる。思考や感情など、形のないものでも「こうした比喩の発想によって表現している」といえる。

本論3

本論2

本論1

（４）仲間の意見との比較から、より適切な言葉だと言える根拠を見つける生徒 A（仮説 2 手だてアの検証）

生徒が考えた小見出しを、タブレット端末を使ってスライドに書き（資料 6）、学級全体で共有した。

本論 1 の小見出しには、ほとんどの生徒が「比喻の説明」と書いてあり、その根拠は A が着目していた文と同じく、「ある事柄を、似たところのある別の事柄で表すことを、比喻という。」という部分だと意見がまとまった。

一方、本論 2 の小見出しは、「比喻の効果」が多かったものの、違う意見を書いている生徒も多かった。また、本論 3 の小見出しは、大きく意見が分かれていた。そこで、本論 2 と 3 の小見出しについて、3、4 人のグループで、お互いの考えた小見出しを基に、より適切な言葉を使った小見出しを考え、その根拠となる言葉に線を引くように伝えた。すると、A のグループでは、本論 2 について、小見出しを「比喻の効果」として、資料 8 のスライドのように線を引いた。「例えば」と書かれている二箇所を、四角で囲んでおり、矢印を使って、「このように、比喻には、形状をわかりやすく伝える効果がある。」と、「比喻には、物事の特徴をより生き生きと印象づける効果もある。」という文につなげている。具体例を用いて、筆者が伝えたいことに結び付けていることが分かる。また、「効果」という言葉に印が付けてあり、繰り返して使われている言葉に着目していることが分かる。A が考えた小見出しと同じ小見出しであるが、A が個人で考えたときには、印が付けられていなかった文や言葉にも着目していることから、グループの意見交流で、仲間の意見と比較しながら、自分の意見にはなかった根拠となる言葉や文に気付くことができていくことが分かる。

本論 3 については、A のグループでは、A 以外のメンバーの考えた小見出しが「比喻の発想」で、A のみが「形のないものを表現する比喻」としていた。グループでの話し合いで意見が分かれ、意見や根拠を上手くまとめられていない様子が見られた。そこで、グループでの話し合いの後、全体でスライドを用いて、グループで考えた小見出しとその根拠を出し合って、共有することにした（資料 9）。

S 1 のグループでは、『形がないもの』と言い換えていて、形がないものの言葉での表現や、様子を表すものと言言葉をつなげる発想について書かれていた」を根拠として、小見出しを「形がないものの表現」とした。具体例を言い換えている部分に着目して表現していることが分かる。また、S 2 のグループでは、「感情に関わる言葉がたくさん使われている」を根拠として、小見出しを「感情を表す比喻」とした。繰り返して使われている言葉を言い換えて表現していることが分かる。A のグループは、『表現』という言葉は何度か出てくると、S 2 のグループの意見もふまえて、繰り返し使われている言葉を根拠として考えたことを発表した。また、「それぞれのまとまりのまとめの部分に書いてある言葉は大事だ」と、グループでの話し合いや全体での共有で新たに考えたことを発表した。仲間の意見と自分の意見を比較しながら、より適切な言葉だと言える根拠を探しながら、小見出しを考えていくことが分かる。

（資料 8）生徒 A のグループが作成したスライド

② したがって、相手がよく知っているものでたとえれば、未知のものでわかりやすく説明することができる。

例えば 図のような形の部品をあなたならどのように説明するだろうか。真ん中に穴の空いた丸いドーナツを相手が知っているならば、一言で「ドーナツのような形」ということができる。しかし、もし比喻を使わないとしたら、言葉を尽くしても、伝えることは難しいのではないだろうか。このように、比喻には、形状をわかりやすく伝える効果がある。

また、比喻には、物事の特徴をより生き生きと印象づける効果もある。

例えば 「雷のような大声」という場合、声の大きさを響き渡る雷鳴にたとえているだけでなく、雷のもつ激烈さや迫力、おそろしさなどのイメージも重ねている。

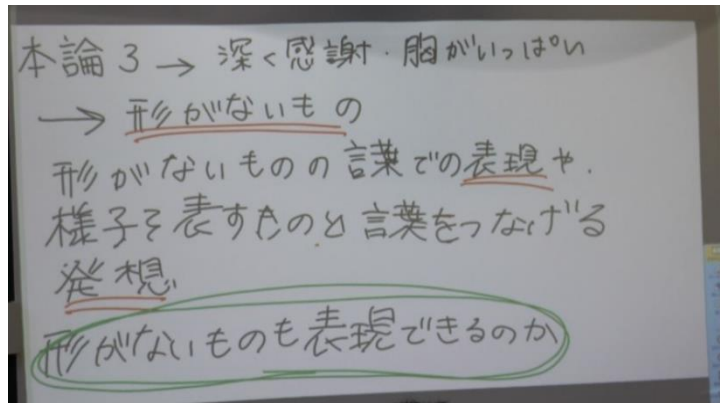


(資料 9)「小見出しについての話し合いを通じて、読み取りの視点を考えよう」

6月29日 授業記録(一部抜粋)

- S 1 私たちのグループで考えた本論3の小見出しは、「形がないものの表現」です。
「深く感謝」「胸がいっぱい」という具体例を使って、「形がないもの」と言い換えていて、形がないものの言葉での表現や、様子を表すものと言葉をつなげる発想について書かれていたからです。

※右のスライドは、S1のグループが作成したもので、発表するときに全体に共有していた画面。これに加えて、本文に印を付けたものも合わせて示していた。



(中略)

- S 2 僕たちのグループは、「感情を表す比喻」です。「頭の中がいっぱい」、「胸がいっぱいだ」や「感謝」、「感動」など、感情に関わる言葉がたくさん使われているからです。
- A 私たちのグループは、「形のないものを表現する比喻」と「比喻の発想」という意見に分かれました。他のグループの意見を聞いて、「表現」という言葉は何度か出てくるので、入れた方が良かったと思います。また、それぞれのまとまりのまとめの部分に書いてある言葉は大事だと思いました。

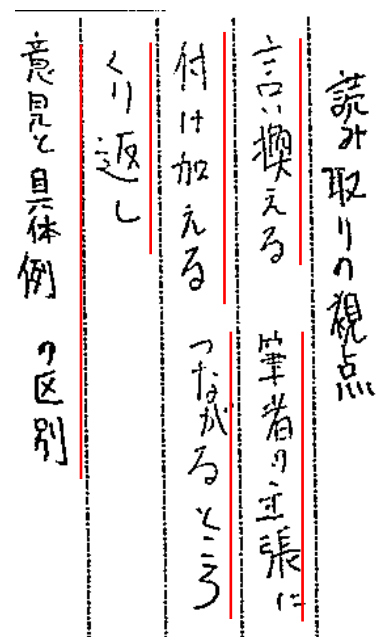
(5) 小見出し作成から読み取りの視点を捉える生徒A(仮説1手だてイの検証)

次に、小見出し作成の際に注目した表現方法から、文章の内容を正確に読み取るために、読み取りの視点を改めて整理することにした。

Aはノートに(資料10)、「言い換える」、「付け加える」、「繰り返す」、「筆者の主張につながる」と書いた。単元の始めに、Aが説明文の読み取りで大切なこととして挙げていた、筆者の主張や例示の区別についても、改めて読み取りの視点として整理している。一方、Aが仲間の意見と自分の意見を比較する中で、言い換えた言葉や繰り返す言葉といった、始めは自分にはなかった意見や見方を捉えることができていることが分かる。

その後、読み取りの視点について全体で意見交流(資料11)をすることにした。S4「言い換えて表現している言葉」、S6「繰り返して書かれている言葉」、S7「筆者の主張に関するまとめの文」という発言があった。Aと同様、グループの話し合いや全体の共有で、小見出し作成のときに根拠とした言葉を整理して、読み取りの視点としてまとめ直していることが分かる。

(資料10)生徒Aのノート



（資料 11）「小見出しについての話し合いを通じて、読み取りの視点を考えよう」

6 月 29 日 授業記録（一部抜粋）

T では、小見出しを考えたときに注目した言葉から、読み取るときに着目したい点と言える、読み取りの視点を考えてみましょう。

（中略）

S 4 言い換えて表現している言葉だと思います。

S 5 付け加えの表現も大切だと思います。

S 6 繰り返し書かれている言葉だと思います。

S 7 筆者の主張に関するまとめの文だと思います。

Aは振り返り（資料 12）に、読み取りの際に大事な視点は、「同じ意味の言葉を言い換えている言葉と、何度もでてくる言葉と、まとめの部分に書いてある言葉だ」と書いた。これは、S 4、S 6、S 7の発言を受けて、考えを再構築したものである。さらに、これらの言葉について、「強調されているから大切だ」と、言い換えたり、繰り返したりすることのよさに言及している。ここからAが、伝えたいことを正確に伝えるために工夫している表現方法から、読み取りの視点に気がつき始めていることが分かる。

（資料 12）第 3 時 生徒 A の振り返り

文章構成があることで、分かりやすく伝えることができる。大事なところは、Dさんが言っていたように、同じ意味の言葉を言い換えている言葉と、何度もでてくる言葉と、まとめの部分に書いてある言葉だと思います。筆者は読み手に分かりやすく伝えたいと思っていると思うから、上のような部分は、強調されているから大切だと思います。

（6）読み取りの視点を振り返り、小見出しを見直す生徒 A（仮説 1 手だてイの検証）

読み取りの視点に気がつき始めたAが、読み取りの視点を習得できるように、改めて単元の始めに考えた、文章を正確に理解するために必要な工夫と比較し、自分の作成した小見出しを見直すことにした。

Aはノート（資料 13）に、「そのまとまりに何が書かれているのかは読み取ることができていた」と書いた。一方で、「筆者の主張の部分からは読み取れていなかった」と書いた。Aが、文章の内容を大まかに捉えているが、筆者の伝えたいことが相手に伝わる小見出しとしては、不十分な表現であることに気付いた。読み取りの視点を習得し、それを活用して、自分の小見出しを分析していることが分かる。

（資料 13）生徒 A のノート

私の小見出しは、そのまとまりに何が書かれているのかは読み取ることができていたと思います。3つめのまとまりは、「比喩の発想」と「形のないものも表現する」の2つの意見があり、このまとまりは、気持ちや活動などの精神活動を表しているから、「形のないものを表現する」にしました。しかし、筆者の主張の部分からは読み取れていなかったと思います。

（7）読み取りの視点を根拠にして、中心となる言葉を捉える生徒 A（仮説 2 手だてイの検証）

単元の最後に、学んだ読み取りの視点を根拠にして、捉えたことを表現できるように、説明文『幻の魚は生きていた』を提示し、中心となる言葉や筆者の主張を捉える場を設定

した。

Aは、キーワードとして「バランス」、「生活や文化」、「時間と労力」などを書いた（資料 14）。これらの言葉は、本文中に繰り返し書かれていた言葉である。また、「保つ＝維持」と書いた。これは、言い換えの表現で書かれている言葉である。繰り返しや、言い換え表現といった、読み取りの視点を使っていることが分かる。

また、筆者の主張となる部分としてAは、①「クニマスが住み続けるには湖全体の環境を守ること」、「バランスを保って共存すること」、②「動物の絶滅は人々の生活や文化に影響を与える」、③「元に戻すには時間と労力が必要」という部分も抜き出していた。これらのAが筆者の主張として捉えた部分は、キーワードとして抜き出したものが含まれているため、中心となる言葉を基に、筆者の主張を正確に読み取ることができていることが分かる。

（資料 14）生徒 A が抜き出したキーワード

- | | |
|---------------|--------|
| ・クニマス | ・酸性 |
| ・保つ＝維持 | ・幻の魚 |
| ・関係＝バランス | ・文化や生活 |
| ・時間と労力 | ・保全 |
| ・環境を守る | |
| ・バランスを保って共存する | |

（資料 15）生徒 A が抜き出した筆者の主張

- ① クニマスが住み続けるには、湖全体の環境を守ること・他の生物とバランスを保って共存すること、つながり合った関係を維持
- ② 動物の絶滅は人々の生活や文化に影響を与える
- ③ 環境が変わるのは一瞬、元に戻すのは時間と労力が必要

4 研究の成果

〈仮説 1 について〉

仮説 1 に対する手だて A では、言葉に着目して、段落の役割やつながりを意識しながら文章構成を整理させた。そして、本論の三つのまとまりについて、内容が正確に伝わる工夫がされている表現や言葉を探して小見出しを作成させることにした。3（2）（3）で示したように、Aは、接続語や表現、具体例に着目して、段落の役割を意識して文章構成を整理し、文章の内容が正確に捉えられる中心的な言葉を捉えることができた。本論 3 の A の小見出しは、中心的な言葉ではない小見出しだったが、その後の仲間との話し合いを通して、筆者の主張から離れていたことに気付く、より適切な言葉を考えることができた。特に、文章構成を整理するときに、細かい言葉や表現に着目させたことで、小見出しの作成で文章の中心的な言葉を捉えることができたと考える。

仮説 1 に対する手だて B では、単元の学習の前後で自分の考えた読み取りの視点を比較することにした。3（1）（5）で示したように、これまでの学びを生かして考えた、文章を正確に理解するための工夫と、小見出しの作成とその話し合いによって改めて整理した読み取りの視点を比較することで、自分の読み取りの際に不十分だった点に気付くことができた。そして、読み取りの視点を意識しながら、小見出しを見直したことで、筆者の主張について気付くことができた。このことから A は、読み取りの視点を定着させ、文章の内容を正確に理解することができたと言える。

よって仮説 1 は妥当であったと考える。

〈仮説 2 について〉

仮説 2 に対する手だて A では、自分が付けた小見出しとその根拠を、タブレット端末を用いて仲間と意見交流をすることにした。3（4）で示したように、意見交流をしたことで、Aは、自分とは異なる見方に触れ、小見出しの根拠となる言葉を探し出すことができ

た。また、話し合いを通じて、より適切な根拠について、その理由となる読み取りの視点に気付くことができた。タブレット端末を用いて、本文に書き込みをしながら話し合ったり、根拠となる言葉を目立たせて意見交流をしたりする手法が、Aに読み取りの視点や意見の根拠として多様な見方を捉えさせることに有効に作用したと考えられる。

仮説2に対する手だてイでは、読み取りの難易度がやや高めの説明文を提示し、文章の中心的な言葉や筆者の主張を捉えることにした。3（6）で示したように、Aは、整理した読み取りの視点を活用して、キーワードとなる言葉を抜き出し、それを基に、筆者の主張を的確に捉えることができた。学んだ見方を活用する場面を、単元の学習の最後に設定する手法が、Aに適切な根拠に基づいて筆者の主張を読み取らせることに有効に作用した。よって仮説2は妥当であった。

5 今後の課題

実践を終え、次のような課題が見つかった。研究を続け、課題解決方法を模索していく。

○読み取りの視点を定着させるための手だての在り方

本実践で、以前の学びから得た読み取りの視点と、本単元の学習後に整理した読み取りの視点との比較で読み取りの視点を定着させる手法の有効性は明らかになった。本実践の中でAは、比較や意見交流を通して、始めは自分になかった読み取りの視点に気付くことができた。しかし、Aが作成した本論3の小見出しは、読み取りの視点を整理する前に作成しており、筆者の主張とのつながりという読み取りの視点が足りていないことに気付いたところで終わってしまった。

本論1を用いて、全体で小見出しを考えながら読み取りの視点を整理した後に、個人でそれを生かした小見出しの作成をすることができれば、内容を正確に読み取って小見出しを作ることができたという実感を味わわせることができたのではないかと考える。習得させたい内容や実感させたい思いを見通して、手法や手だての順序を吟味する必要性を感じている。

○仲間と自分の意見を比較して多様な見方を捉えられるようにするための手だての在り方

本実践で、タブレット端末を用いて、小見出しやその根拠となる言葉や文を共有することで、お互いの見方を比較させる手法の有効性は明らかになった。しかし、今回の文章において、小見出しを付けた本論1と2については、意見が限られてしまったため、タブレット端末を用いて共有したときに、同じような意見が多く見られ、そこから新たな考え方や多様な見方を引き出すことが困難であった。

お互いの意見を比較して、多様な見方を捉えられるようにするためには、意見交流によって深めたい部分を限定して話し合いをさせたり、様々な読み取りが可能な資料や、人によって感じ方の変わる題材を扱っている資料を用意したりすることが必要なのではないかと考える。目的に応じて、資料の扱う部分や資料そのものを吟味する必要がある。

○学んだ見方や考え方を活用して表現する手だての在り方

本実践で、読み取りの視点を根拠にして、文章の中心的な言葉や筆者の主張を捉えさせる手法の有効性は明らかになった。しかし、読み取りの視点の活用の仕方を十分に伝えないまま、キーワードを抜き出させたため、Aは、繰り返し使われている言葉という理由のみでキーワードだと判断して抜き出した言葉があり、読み取りの視点を十分に活用することができていなかった。

知識を習得させた後に、それをどのように活用するのかについても学習してから、活用する場を設定する必要があったのではないかと考える。知識を活用して、根拠となる言葉を用いて説明できたという実感をもたせるために、活用の手だての在り方を引き続き模索したい。